

小 論 文 (90分)

(令和6年度 前期日程)

注 意 事 項

問 題 冊 子	解 答 用 紙
<ol style="list-style-type: none">1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。2. 問題冊子は全部で5ページである。表紙を開くと白紙があり、その裏が1ページ目である。不鮮明な印刷、ページの脱落に気付いたときは、試験監督者に申し出ること。3. 問題冊子は持ち帰ること。	<ol style="list-style-type: none">1. すべての解答用紙に受験番号、氏名を記入すること。記入を忘れたとき、あるいは誤った番号を記入したときは失格となることがある。2. 解答用紙の枚数は、2枚である。3. 解答は、指定された箇所に記入すること。

次の文章A、図、および文章Bを読んで、問1と問2に答えなさい。

【文章A】

海を題材に授業を行う「海洋教育」の充実が、2020年度以降順次実施する小中学校の次期学習指導要領に盛り込まれた。先行実施している各校では、沿岸部や内陸部など地域の特徴に応じて効果的な教育方法を模索する。現場の試みを探った。

(中略)

海洋教育は2007年に施行された海洋基本法や2013年に閣議決定された海洋基本計画で「海洋に関する幅広い知識を有する人材の育成に取り組む」として推進が掲げられてきた。

2017年3月に公示され、2020年度から順次実施される小中学校の次期学習指導要領には、社会科に「海洋の広がりや島々の位置に着目して多面的に考察する」などの内容が盛り込まれた。資源や領土を巡る国際問題などが背景にあるとみられるが、海洋教育に明確な定義はなく、先行する各校は試行錯誤を重ねている。

東日本大震災で大きな被害があった宮城県気仙沼市の市立階上小^{ほしかみ}では、5年生の児童35人が社会科や「総合的な学習の時間」^(注1)で、復興と防災の両面から海と地域のつながりを学んでいる。

ワカメの養殖体験や水産加工場の見学で漁業従事者と接し、水産業がどう立ち直ったか学ぶほか、津波で受けた被害を基に被災したらどう行動すべきか話し合い、自治会長らからアドバイスを受ける。同校の教頭は「海との関わりの深さを具体的に知ること、児童の防災に対する意識が高まっている。自分の命だけでなく、地域を守るという自覚を育てたい」と意気込む。

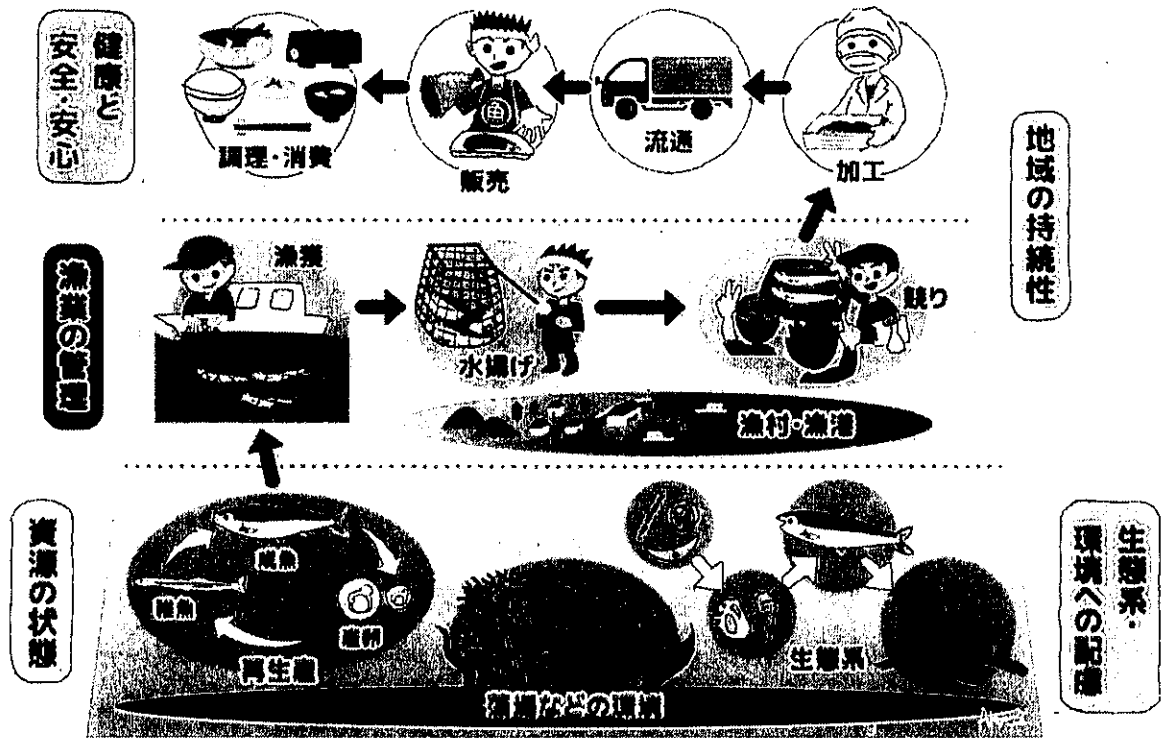
内陸県にある奈良教育大付属中(奈良市)は2年生約150人を対象に、2泊3日の臨海実習を軸とした海洋教育を4～9月の半年間にわたって実施している。博物館の研究員を招いて、海の環境についてのレクチャーを受け、研究計画の立て方を事前学習。100キロ以上離れた三重県鳥羽市の磯で、生物の観察や採集を行う。「カニは色やにおいを感じるのか」など各生徒がテーマを設定し、研究や実験の結果を発表する場も設けた。

2017年度から臨海実習と授業の相乗効果を高めるために形式を変更した。同校で理科を担当する教諭は「生徒は海について漠然としたイメージしか持っていなかったが、授業を通じて多彩な生命が存在する場だと捉えられるようになった」と手応えを口にしていく。

(注1) 「総合的な学習の時間」：総合的な学習(探究)の時間は、変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標としていることから、これからの時代においてますます重要な役割を果たすものである。

(日本経済新聞(夕刊)、2018年3月6日版より一部改変)

【図】



この図は、海のなかでさかなが生まれて成長し、それを一定の秩序に従って各地域の漁業者が獲ったあと、陸上の加工・流通を通じて価値が高められ、各家庭の食卓でおいしく食べられるまでを、模式的にあらわしたものです。

(SH“U”N サステイナブルでヘルシーなうまい日本の魚プロジェクト, <https://sh-u-n.fra.go.jp/shun/>より引用)

【文章B】

海は、岸辺に繰り返し打ち寄せる波、浜辺の漂着物、磯の小動物などを通して、私たちの想像力を育むとともに、自然への畏敬の念を抱かせる源として、古くから数々の文学、詩歌、絵画の対象になってきた。また、海は、水産漁業、海運、海洋スポーツなどの社会経済余暇活動ばかりでなく、気象・気候への大きな影響などを通して、私たちの生活と密接につながっている。

(中略)

2020年6月に日本学術会議地球惑星科学委員会地球惑星科学人材育成分科会から「初等中等教育及び生涯教育における地球教育の重要性：変動する地球に生きるための素養として」と題する提言が公表された。その第1章で、地球に関わる教育の重要性を、実用的価値、経済的・国家的価値、市民社会的価値、文化的・教養的価値、教育的価値の5つの視点から述べている。以下に、この提言に倣って、海洋教育の重要性を、上に挙げた5つの視点から考える。

(1) 実用的価値

人々は、海からさまざまな恵みを受けている。海に面した地域では、眼前に広がる海の自然の営みや恵みに深く関わる文化が形成されている。海のさまざまな環境に適応して生息する多種多様なプランクトンが、漁業資源生物を支えることで、水産業は持続的に発展する。海洋は、波力・潮流・海流発電、温度差発電などの再生エネルギー源、あるいは石油、マンガン団塊、メタンハイドレートなどの海底資源として、その利用開発に大きな期待が寄せられている。一方、人々は、津波、高潮、異常潮位、離岸流などの脅威にさらされている。このような海に関わる環境保全、食糧確保、資源・エネルギー利用開発、防災・減災事業を担う人材の育成には、海についての基礎知識を修得し、社会と海の自然との間の複雑な関係について配慮する際に必要な豊かな想像力を育む機会を確保する必要がある。

(2) 経済的・国家的価値

日本の国土は平野が少ない結果、容易に活用できる土地が少ないのに対し、日本の排他的経済水域の面積は世界第6位と広大であり、黒潮と親潮が接する日本東方海域は世界有数の好漁場となっている。一方、わが国は、その産業と国民生活を支える地下資源と農作物の大部分を海外に依存しており、その輸入を海上輸送が担っている。また、日本の国土は、南方の海で発生する台風の常襲地域であり、海を源とする大量の水蒸気が豪雨・豪雪をもたらしている。このような国土に暮らす人々の生活を維持するために、国は港湾と海運の円滑な管理運用を行うとともに、漁業資源変動や災害を引き起こす可能性がある自然の変化を予測し、適切に対処する施策を実施する必要がある。そのための事業、施策立案・実施、研究開発を行う人材の育成には、海についての基礎知識を有し、ある事業・施策が望まぬ効果を引き起こす可能性についても十分に配慮できる豊かな想像力を育む機会を確保する必要がある。

(3) 市民社会的価値

海底地形や深海に生息する生き物たちの生態については、その調査が困難であるために、ほとんど知られていない。また、プラスチックごみや地球温暖化による海水温の上昇が海の生き物へ及ぼす影

響についても、その過程が複雑であるために、十分に解明されていない。このため、海についての重要な知見の更新の頻度は、他の分野に比べて格段に高い。海洋教育で、海についての科学的知見が更新される過程を具体的に学ぶことによって、対象についての共通理解をさまざまな証拠に基づいた意見交換によって深めるという「科学の営み」と、観測・調査が不十分な状況では十分に確かな答えを求めることは難しいという「科学的な知見の限界」についての理解が深まるとともに、定説にこだわらないで、新たに提案された説にも柔軟に対応することができる豊かな想像力が育まれる。

海洋教育を通して、「科学の営み」や「科学的な知見の限界」を具体的に学び、豊かな想像力をもつ人が増えることによって、利害が対立する問題への対応を協議するさまざまな集まりでの合意が、個人の信念・信条や専門家の権威ではなくて、証拠に基づくフラットな意見交換によって形成されるようになることが期待される。

(4) 文化的・教養的価値

海に関わる伝承・伝説・科学的知見は、海辺で観察されるさまざまな事柄とその変化を整合的に理解したいという人間がもつ根源的な欲求への知的探究と試行錯誤の歴史の帰結といえる。この歴史を通して蓄積された海についての基礎知識を海洋教育で総合的に学ぶことによって、人々は、海に対して畏敬の念を抱きながらも、身近に感じるとともに、海が人間生活に影響を及ぼしているだけでなく、人間活動が海に影響を及ぼしていることを理解できるようになる。その結果、海洋生物資源の適正利用、生物多様性の確保、生態系の保全、海洋プラスチックごみ汚染防止などについて、資源が有限な地球上に共に暮らす市民として適切な行動を選択できるようになる。また、さまざまな過程が海の見えないところで進行していること、あるいは先人たちが繰り返してきた試行錯誤の歴史を学ぶことによって、豊かな想像力が生まれ、それに基づいて想定外な事態への対応を予め準備できるようになることが期待される。

(5) 教育的価値

世界の海は一つにつながっており、海の環境の変化には、世界各地におけるさまざまな社会経済活動と世界の海における物理・化学・生物・地学の各々の分野の素過程^(註2)が互いに複雑に関係している。また、海は人々の芸術的感性を触発する存在でもある。このため、海洋教育は、社会科、理科、他の全科目を横断した複合分野の教育であるといえる。このことは、社会科、理科および他科目の教育の各々をいかに完璧に行っても、そこには各教科科目で学ぶ項目が互いに関係している海については、海洋教育でなければ学ぶことはできないことがあることを意味している。海洋教育によって、海の自然と人間の営みとの関係を総合的に理解し、多面的に自然や社会を考えることができる想像力あるいは教養のある人間が形成されることが期待される。

小学校において、海が見えないところで日常生活と密接につながっていることを知ることで、海が身近な存在であることを学ぶとともに、目に見えない事柄に思いを巡らす想像力が育まれる。また、海に関わるさまざまな事柄についての好奇心が刺激され、その後の中学校での社会科および理科教育において個別の事象の各々を学ぶ意欲を高めることが期待される。高等学校において、それまでの学校教育の全教科で海について学んだことを体系的に理解することが期待される。さらに、大学教

育や社会人教育で海を学ぶことで、社会が直面する環境保全、防災・減災などの諸問題の解決に必要な基礎知識の再確認と想像力の喚起が期待される。

以上に述べたように、海洋教育には多様な価値がある。さまざまな海洋教育の現場においては、このことを十分に認識したうえで、教育目標を明確に定め、教育計画を組み立てる必要がある。

学校における海洋教育は、社会科、理科、他の全科目を横断した複合分野の教育であり、「総合的な学習の時間」で行われるのが最もふさわしい。

(注2) 素過程：基本的かつ初歩的な過程。

(市川洋「地球環境問題と海洋教育」, 教育展望, 68(3): 48-53, 2022年より一部改変)

問1 文章Bの下線部では、学校における海洋教育は「総合的な学習の時間」で行われることが最もふさわしいとしているが、その理由を文章Bの内容に基づいて300～400字で述べなさい。

(配点：80点)

問2 文章A・Bや図で示されているような海と我々の生活とのつながりについて理解を深めるために、あなたならどのような海洋教育の授業を受けたいか、理由とともに500～600字で述べなさい。

(配点：120点)